

# 国文学研究資料館報

第24号

昭和60年 3月

## 連歌研究の現状と今後の課題

島津忠夫

最初から私事にわたって申しわけないが、私がまだ大学を出て間もないころであった。それは昭和二十六年五月のこと、女子学習院で俳文学会の第一回研究発表会が行われ、私は「連歌史に於ける心敬の位置」と題して発表した。しかし、その時のことであつたと思ふが、今は亡き久松潜一氏が「連歌にも連歌大系があればよいのですが」という意のことを洩らされたのが妙に記憶に残っている。当時「日本歌学大系」はほぼ完成していたこと、私が「ささめごと」に触れたのと、それが「日本歌学大系」に所収されていたこと、そうして、他の連歌論書がほとんど未翻刻で、あちこちの図書館・文庫をかけめぐって書写してくるよ

り方途のなかつたことなどとかかわりがあつたのだらうと思ふ。それから三十数年がたつた今は、「連歌貴重文献集成」十集、別巻三編が完成して、主要な文献が容易に見られるようになった。連歌論書ばかりでなく、作品も、撰集・句集は、「古典文庫」「貴重古典籍叢刊」などで、つぎつぎとすぐれた翻刻が出てゐる。遅々とした進みで、まだ半分も出ていないが、「千句連歌集」も「古典文庫」で十冊まで刊行の予定ある。

かつては、連歌研究は資料紹介の占める位置が大きかつたが、これからは当然さまざまの見地から文学性の追求が試みられてゆくことになることと思われる。「連歌貴重文献集成」の編者であり、伊

地知鐵男・木藤才藏両氏とともに、まさに今日の連歌研究の第一人者である金子金治郎氏は、その古稀を記念して刊行された「連歌と中世文芸」(昭和五十二年刊)において、戦後一般の連歌研究は盛んといつてよく、範囲は広くなり、扱い方も多様であつて、貴重な成果が次々に現われている。昭和初期からは想像もできない盛況であつて、中世の他のジャンルの研究に較べても、遜色がないように思ふ。ただ時々、連歌はもう研究することがないのではないか、などという声を耳にすると、とんでもない誤解に驚くのである。連歌研究のただ今の状況は、基礎資料の整理提供といい、解明すべき問題点といい、苦勞するのはこれからという気がする。

と言われている。しかも、「金子金治郎連歌考叢」として、「心敬の生

活と作品」(昭和五十七年刊)、「宗祇の生活と作品」(昭和五十八年刊)「連歌論の研究」(昭和五十九年刊)と立て続けに刊行されている。旧稿ばかりでなく、新稿を多く加えて、それぞれに現在の時点の最高峰を示されているのは偉観であり、さきの言葉をみずから実行垂範されているといえよう。

もう一つ、私事に触れるならば私が連歌の研究を始めるに至つたそもその動機は、京都大学で頼原退蔵先生の連歌史の講義を聞いたことにある。先生の講義ノートは、公刊すべくながら私の手もとにあつて気になつていたが、「頼原退蔵著作集」第二巻「連歌」(昭和五十四年刊)の中に、「昭和八年一月一日起稿 連歌史(未定稿)」「昭和十七年四月起稿 連歌史稿本」の二冊を合わせて収めることができてほつとした。ようやく先生の連歌史を公開の場に示すことができたという安堵感である。このノ

目次

連歌研究の現状と今後の課題 島津忠夫……………1

共同研究公報の結果等について 共同研究委員会……………3

古典作品典拠ファイルについて 整理閲覧室……………5

第八回国際日本文学研究会集會：情報室……………7

文献資料部事業報告……………福田 秀一……………8

研究情報部事業報告……………櫻町 知彌……………10

整理閲覧部事業報告……………本田 康雄……………12

電報……………14

利用者のお知らせ……………整理閲覧室……………15

昭和六十年年度春季学会開催一覽……………16

情報室……………16

ートを整理しながら、私は昭和初年から十数年の間の連歌研究の歩みを肌で感じることができたように思う。福井久蔵氏の「連歌の史的研究」(昭和五年刊)、「連歌の道」(昭和十六年)や、山田孝雄氏の「連歌及び連歌史」(昭和七年刊)、「連歌概説」(昭和十二年刊)とともに連歌研究の第一期であった。それに続いて伊地知・金子・木藤諸氏のすぐれた業績が第二期を形成する。伊地知氏以下の研究はあらためていまそれぞれの主著をあげるまでもなく、周知のことに属するので省略するが、さきの「連歌と中世文芸」に、金子氏は、

広島でいっしょに学んだ諸氏の間で、この論文集が計画されたとき、私は再びお受けすることにした。再びといったのは、還暦のときの論文集「連歌とその周辺」があるからである。辞退すべきだと考えなくてはなかったが、この計画が必ず連歌研究に貢献するものであることを思い、あえて諸氏の好意に委ねることにした。

と言われている。氏の連歌研究に寄せる情熱を端的に示す言葉であるが、事実十年を隔てて刊行され

たこの二つの論文集は、連歌研究の歩みを刻みこんでいる。さらに言えば、「連歌貴重文献集成」完成を記念して、金子氏および湯之上早苗氏の手で、近く編集・刊行される運びになっている連歌研究の新しい論文集が、まさしく連歌研究の現状を象徴するものとなるうかと思われる。

その連歌研究の今後の課題としては、作品の表現面での説明が残っている。日本古典文学大系「連歌集」(昭和三十五年刊)、日本古典文学全集「連歌俳諧集」(昭和四十九年刊)、新潮日本古典集成「連歌集」(昭和五十四年刊)などがあるが、注釈を加えられた作品はまだほんの一部に過ぎない。「菟玖波集」・「新撰菟玖波集」・「竹林抄」にしても、その一部が日本古典文学大系「連歌集」に注釈があるだけで、福井氏の「菟玖波集」以来、連歌研究の長足の進歩を遂げている今日の立場での注釈が試みられていない。

連歌史の面においても、資料にとほしい鎌倉時代や南北朝期は、なお今後の資料の発見にまたねばならないが、資料の豊富に残っている近世初期の研究が重要である

う。紹巴で連歌史がうち切られることが多かったが、昌球・宗因らの連歌を研究することによって、連歌と俳諧とのかわりを明らかにすることが可能であろう。そればかりでなく、宗因の連歌など、連歌の文芸性を考える上にきわめて重要であろうと思う。私は蕉風の俳諧を考える上に、宗因の連歌における達成や、西順らの役割を考える必要があると思っている。

次に、連歌の研究については、中世の武將と連歌師とのかわりなど、その盛んに行われた背景を明らかにしてゆく必要がある。米原正義氏の「戦国武士と文芸の研究」(昭和五十一年刊)、川添昭二氏の「中世九州の政治と文化」(昭和五十六年刊)・「中世文芸の地方史」(昭和五十七年刊)など、国史の専門家の側からの連歌への関心が示されており、さらに鶴崎裕雄氏の「町」を往く連歌師―地方史研究における紀行文の有用―(「日本の都市と町―その歴史と現状」昭和五十七年刊)所収)など一連の国文学と国史学の両側面から切り込みを見せた論考が有益である。その意味で、昨五十九年九月二十六日に明治記念館で行われた「連歌研究

の明日」と題した「白山万句」出版祈念シンポジウムは有意義であった。鶴崎氏の「白山万句興行の実態」、木越隆三氏の「慶長期前田家臣団の構成と動向」、棚町知彌氏の「白山万句以前―以後―加能連歌壇史―」の報告が、国文学・国史の両面からの検討を試みられ、討論においても、金子氏や白田甚五郎氏らとともに、国史の側から黒田俊雄氏に加わり、会場にも国文学研究者ばかりでなく、多くの国文学研究者の参加が見られたことは特筆すべきである。従来とても、国文学の学会に、国史学の専門家の講演を依頼することは往々にしてあったし、討論の講師としても国文学の専門家に加わってもらうことはあったが、一つの会場で、一体となって討論するという機会はめつたにない(芸能史研究会があるが、今は触れないでおく)。この催しが実際にはあまりにも盛り沢山であったために、討論の時間の余裕がほとんどなかったことは残念であったが、こういった試みは貴重であり、今後にも大いに期待したいと思う。

今後の課題ということでは、五十八年度から三年間にわたって当

館の共同研究として行われた「連歌資料のコンピュータ処理の研究」にも触れておかねばならないであろう。連歌作品、千句や百韻は諸所の図書館・文庫に散在して所蔵されており、百韻などは連歌集にさまざまな形で所収されて書写されており、それらを整理して、連歌作品年表を作成することが、連歌研究の基礎作業として必要であった。連歌研究者はめいめい何等かの形でみずからの備忘のためのものを作つて持っていることと思われるが、それを公刊されたものとして、奥田勲氏による「連歌作品年表稿」(東京大学教養学部人文科学科紀要第32輯 国文学・漢文学 Xへ昭和三十九年四月、および同 XIへ昭和四十一年十二月)の補遺)があり、多くの研究者に便宜を与えていた。ただ、それは連衆名を数人の主要作者にとどめており、下限をほぼ慶長年間にとどめていたし、その後の補訂を必要とするが、とても個人の力では完全にすることは容易でない仕事量である。それをコンピュータ処理によって、可能かどうか、その方法をさぐってみることが、この共同研究の目的であった。その研究は三か年の

研究期間を終えようとし、その詳細については、「国文学研究資料館共同研究報告3」に「研究経過概要報告」を記しておいたが、これはあくまで方法論であり、国会図書館蔵「連歌合集」と、館蔵連歌資料(紙焼写真およびマイクロフィルム)による連歌作品年表および索引も一つのサンプルに過ぎない。要は、全国所在の連歌資料を網羅して完成しなければならぬのであり、それはなお遠い将来の

### 共同研究

## 公募の結果等について

### 共同研究委員会

一、応募状況と審査結果  
国文学研究資料館は、共同利用機関として、従来から共同研究を実施し、共同研究報告の出版も行ってきたが、さらに広い立場から共同研究を進めるために、共同研究テーマを公募することに踏切り、昨年九月、昭和六〇年度共同研究の公募を行った。このことについては館報23号(昭59・9)において棚町知彌共同研究委員長が、従来の経過、公募の趣旨、および実施中の共同研究について述べている。

ことに属するようである。ただ、諸種の索引を作成するためには、あらかじめ検索に必要な事項が何であるかをよく検討し、それに応じてカード作成要領を吟味し、きまりに従つて正確に記入した上で、入力すれば、その量が多くなればなるほど、効力を発揮することは事実であろう。なお今後とも検討を加えてゆかねばならないが、将来への期待は大きいと言えよう。  
(大阪大学教養部教授)

さて、初めての公募であったが、七件の応募があり、これらについて昨五十九年十二月三日の共同研究委員会で第一次審査を行い、その内の五件を候補とすることになった。ただ、この内の一件は、コンピュータの利用を伴うものなので、館内で実施上の諸問題を種々な面から検討した結果、今回は、これを除く四件について実施計画の提出を求めることとし、本年一月三十日の共同研究委員会の了承を得て、この四件の実施計画を採

択することに決定した。  
採択された課題、研究者、研究期間は表1の通りである。

### 二、実施報告、成果の発表、今後の課題等

公募による共同研究は、研究代表者が館外の研究者である場合があるなど、従来館が直接計画し、実施してきた共同研究とや、異なる面もある。それで終了後研究代表者から館長に提出して戴く「共同研究実施報告」の様式を定めた。経理面を館が行うため、その報告は不要であり、従つてこの実施報告は、科学研究費補助金による研究の報告に比べればはるかに簡単なものである。  
また、成果の発表については、具体的にはいろいろなケースが考えられるが、館と館外の研究者が共同して学界に貢献するという共同研究の趣旨に沿つて、自由に、かつ多くの人々が利用できるようなという方向で、共同研究委員会においてガイドラインが審議され、了承されている。この問題は、今後次々と共同研究を実施し、好ましい事例を積み重ねることによつて、おのずから一応の方針が定まつてゆくであろう。

表1 昭和60年度公募による国文学研究資料館共同研究一覧

研究課題	共同研究代表者(○印)・共同研究者		研究期間
	氏名	職	
三十六人集諸本の研究	○草田善信	横浜国立大学教育学部教授	昭和60年4月1日から 昭和61年3月31日まで
	新藤協三	国文学研究資料館助教授	
	藤田洋治	鶴岡工業高等専門学校講師	
	加藤幸三	筑波大学大学院博士後期課程	
鎌倉時代物語の研究	○平林文雄	群馬県立女子大学文学部教授	昭和60年4月1日から 昭和61年3月31日まで
	島田卓斎	群馬県立前橋南高等学校教諭	
	神野藤館夫	跡見学園女子大学文学部助教授	
	三角洋三	東京大学教養学部助教授	
	小峯和朗	国文学研究資料館助教授	
	向部好臣	国文学研究資料館助手	
江戸狂歌本の書誌的研究	○渡田義一郎	大妻女子大学名誉教授	昭和60年4月1日から 昭和61年3月31日まで
	粕谷宏紀	日本大学文理学部教授	
	延廣真治	東京大学教養学部助教授	
	岩川亨	大妻女子大学文学部講師	
「日吉山王利生記」に関する研究	岡崎雅彦	国文学研究資料館助教授	昭和60年4月1日から 昭和61年3月31日まで
	○山嶋美夫	同上	
	小峯和朗	同上	
	竹村清治	金沢美術工芸大学美術工芸学部講師	
	播摩光寿	文化女子大学室蘭短期大学講師	
	前田雅之	早稲田大学大学院文学研究科後期課程	
吉原浩人	早稲田大学高等学院教諭		

表2 継続する共同研究

研究課題	共同研究者
久松本の解題研究	福田秀一(国文学研究資料館教授)ほか
日本文学の特質	フリッツ・フォス(国文学研究資料館外国人研究員、ライデン大学名誉教授)ほか

表3 昭和59年度をもって終了した共同研究

研究課題	共同研究者
「逸翁美術館蔵国文学関係資料」の解題研究	伊井春樹(大阪大学文学部助教授)ほか3名
「連歌資料のコンピュータ処理」の研究	棚町知彌(国文学研究資料館教授)ほか11名
「日本文学における〈向う側〉」の研究	キンヤ・ツルタ(プリティッシュコロニア大学教授)ほか7名
「江戸文学におけるユーモア」の研究	ハワード・スコット・ヒベット(国文学研究資料館客員教授、ハーバード大学教授)ほか11名

なお、今回は最初の公募なので、とりあえず期間を一年に限ったが、より長期間の計画、或いは今回採択されなかったコンピュータを利用する計画などへ拡大してゆく可能性などを将来の課題として委員会は今後さらに検討してゆくこととしている。

三、公募以外の共同研究

従来から行っていた公募以外の共同研究については、表2の二件

を引き続き昭和六〇年度において実施することとし、(ただし、外国人研究員を中心とする共同研究「日本文学の特質」は、大きなテーマとしては変らないが、具体的内容は毎年変わる)、表3の四件は昭和五十九年度をもって終了することとした。これら四件についての報告は、それぞれ出版の計画が別途に進められている。

(山中光一)

# 古典作品典拠ファイルについて

## 整理閲覧室

### (1)はじめに

昭和五十九年度より五年計画のもとに、古典作品典拠ファイル作成事業がスタートした。この機会に、第一年目の経験を踏まえて簡単な紹介を試みたい。

「古典作品典拠ファイル」と呼ぶ際の「作品典拠」とは、古典作品の一件について、統一書名を決定し、併せて著者名、巻冊数、別書名、成立年代、内容分類等の正確な情報を付した記録であり、その作品に関する諸本・諸版を同一の作品として統合したり、或いは他の作品と明確に区別するための典拠である。また、「ファイル」には、そうした記録を機械可読の形で蓄積、維持すること、すなわちデータベース化の意味がある。

一般に大量の書誌(目録)情報をコンピュータ処理する場合には、前提として「典拠ファイル」が必要であるが、その意味で「古典作品典拠ファイル」の作成は古典籍書誌情報のコンピュータによる取扱いのためまず行うべき重要な作

業であることはいうまでもない。

現在、文献資料がどこに所蔵されているかを確認する場合や関連資料の大略の見当をつける時には、岩波書店の「国書総目録」(以下「国書」と略記する)がある。その第一巻が発行された昭和三十八年より二十年余にわたり、国文学者等、古典の研究に従事する者にとって必須の参考資料として利用されている。

この事業は、「国書」の「作品典拠」に当る部分(所在情報以外)をそのままデータベース化し、当館の古典の典拠ファイルの基礎としようというものである。

### (2)データ

「国書」中に収録されている項目数(作品数)は推定四十万件余とみなされる。今回の事業では、予算上の制約もあり、全体の約1/3に相当する約十三万件を扱うことに落ち着いた。五年計画で国文学資料を中心に十三万件を選定しデータベース化して、古典作品典拠ファイルの基礎として、将来にわた

ってこれを増加充実してゆくこととした。

十三万件の選定に当り、「国書」全巻中に現われる分類名及び分類名ごとの推定項目数の抽出調査を行った。その結果を踏まえ、予定件数をにらみながら、選定すべき分類名リストの原案を作成した。原案は館内の調整を経て最終案にまとめられた。以上の結果、文学、

国文学、芸能など、いわゆる国文学分野に属するものもとより、儒学、国学等の思想関係、目録、書誌学等の総記に当たるものまでカバーされることになり、国文学研究を中心に、必要な項目はほぼ網羅しえたものと思われる。

次に、選定された十三万件をパンチ入力し、校正する作業が続く。項目についてパンチする記載事項は、書名、よみ、巻冊数、角書、別称、分類、著編者、成立及び備考である。

これらの事項をそのままパンチ入力し、データベース化するのが原則だが、一部修正を加えたり、情報を付加する場合がある。検索や排列というデータベース化のメリットを最大限に活用するためである。よみの表記で、「国書」では

無視されている拗音、促音等は現行表記に従い小書すること、書名、別書名でよみの振られていないものによみを与えること、などである。

### (3)形式変換

形式変換とは、「国書」データを当館で利用する作品典拠ファイルの形式にコンピュータプログラムによって変換することである。つまり、印刷体の形式からコンピュータ処理が可能な形式への変換(機械可読化)を意味する。

そのためには、個々の「国書」の記載事項をコンピュータが正確に確認できるようにしてやらねばならない。例えば、「国書」の書名のみはルビ用の最少ポイントの活字が使用され、これがよみであることは一目瞭然である。ところが機械可読化する場合、つまりパンチされたデータでは、印刷媒体ほどの融通性はなく、ポイントの大きさによる区別ができないため、よみは書名と一連のデータとして読み込まれることになる。従って、よみであることを認識させるための区切りを付加してやる必要がある。同じことが書名、別書名の表記、分類欄等に採用されている小

書きについても言える。「嗚呼不世之助嘶」の例に見られるような角書、冠称の類、「相合傘前編」のような部篇を付したものの等、活字ポイントと落として純粹の書名部分と区別されている場合なども、〃〃(スラント)を挿入して、コンピュータがその区別を認識できるように手当てが不可欠となる。

形式変換のなかで最大の難関は著者名名欄である。その理由は、記載形式(記述文法)の相違が大きいためである。例えば、「国書」では著者名に続けてカッコでその別称を付している場合がある。一方の作品典拠ファイルでは、同一人物であれば単一の著者名しか保持しない。部篇ごとに著者が併記されている場合も作品典拠ファイルと異なる。細かい点では、「国書」で省略されている著者の役割を示す「著」は、作品典拠ファイルでは必須であり、補なつてやる必要がある。その他にも著者名欄は簡単に交換がきかない部分が多く、その分処理システムへの負担が大きくなる。論理的にコンピュータでは処理できないものは、後述する著者名コントロールの時点に持

ち越し、手作業の修正を加えることになる。

このように、形式変換は概ねコンピュータの力を借りて行うが、どうしても手作業に頼らざるを得ない部分もある。そのまま変換が可能なものと不可能なものを、「国書」の記載内容に即して区別することが重要である。つまり、「国書」

の記載内容や形式の精緻な分析が形式変換の成否の鍵になる。とは言え膨大な量を逐一調査することは不可能に近い。今回も、約一割ほど抽出、分析し、内容・形式のパターンはほぼ洗い出したと思われるが、一部予想外のデータが出てきて、手作業に頼ることは避け難いかも知れない。

#### (4) 著者名コントロール

著者名は書誌事項の中でも、書名に匹敵する重要なものである。「国書」には別巻に「著者別索引」があり、著者別の著作リストとして便利だが、当館では、目録中の著者名標目の形を統一するための典拠として、これまで利用してきた。そして、現在は「著者別索引」の項目の著者名(統一著者名)及びその別称をパンチ入力し、著者ファイルとしている。

この著者ファイルと作品典拠ファイルとを結びつけることを著者名コントロールという。「コントロール」の著編者欄に記載された著者名を、それに該当する著者ファイル中の統一著者名に統一するからである。ある作品ではAという名前で出てきた著者が、別の作品ではBになつていれば、同一著者の著作を集中させることができない点では、検索上の不便を来す。一方、著者ファイルでは、AとBの関係が把握されているので、これを参照すれば、作品典拠ファイル中の同一著者で異なつた著者名を統一することができることになる。

具体的には、「国書」著編者欄の著者名と著者ファイル中の統一著者名及び別称との間で、コンピュータによる照合処理を行う。一致すれば問題ないが、一致しない著者名については、「著者別索引」等を参照したり、他の資料を調査したうえで、著者ファイル中のどの著者に該当するかを決定しなければならぬ。

不一致になるケースには、著者そのものがまだ登録されていない場合、登録されていてもその著者名(別称)が欠けている場合に分か

れる。いずれも、著者ファイルへの追加が必要になる。

また、著者ファイル中の複数の人物に一致する場合もある。一番多いのは同名異人のケースだが、別人である著者同士が同一の別称を持つている例もありうる。これも、参考資料、特に「著者別索引」に付されている著作の書名などを手がかりに、慎重に判断しなければならぬ。

#### (5) システム

古典作品典拠ファイルの作成に必要なコンピュータシステムは、これまで述べてきたように、形式変換システムと著者名コントロールシステムの二つである。これらのシステムは、現在、研究情報部情報処理室において開発中である。システム的には、当館の他の、運用中あるいは開発中のシステムと相互に適切に関連付けられたものになると思われるが、その詳細についてはいずれ報告されることと思われるのでここでは述べない。

#### (6) おわりに

以上、駆け足で事業のあらましを述べた。現在はパンチ外注のための原稿作成、項目選定、校正等の作業に全力を尽くしている。年

度内には約二万五千件ほどのデータのパンチ、校正作業が完了する

予定である。  
(石井啓聖・歌野博)

## 第八回国際日本文学研究集会

昭和五十九年十一月九日(金)、十日(土)の両日、例年のように第八回国際日本文学研究集会が開られた。

前回(第七回)は、大規模な国際アジア北アフリカ人文科学会議(CISHAN)が開られた後であったためか、やや参加者が少なかったが、今回は百名を超える参加者(内、海外から三十五名)があった。

研究会における発表論文等の内容については会議録に詳しいが、概要を紹介すれば次のとおりである。

第一日最初のセッションは芳賀徹座長のもとで、作品の文学理論的分析を試みた二つの発表が行なわれた。Jacques Levy氏は、恰も推理小説が犯人を隠すように、植谷雄高は主題を隠してしまうがジョルジュ・ジュネットの物語り理論によって、語りの「水準」がextradiegetiqueかintradiegetiqueか、または語りの「関係」がhomo-

### 新収資料紹介 ②

#### 『寛佐』

本書は所謂「いろは新式」の一本。本文の系統は京都大学国文学研究室蔵(真如蔵旧本)、『異本色葉新式』に近いが、少くともその二次増補本に相当する。

京大本にはほぼ共通する部分が原型で、昌琢講説の寛佐開書(寛永九・八・二七、同十・七・一九他)、および紹巴・昌叱・玄仍・昌琢・昌程等の諸説からなる。最終項「す」の中ほどに記された「寛佐法印以自筆一校斗/寛永七年正月廿日」なる奥書は、この段階で付されたものであり、原本が寛佐系の「いろは新式」であることを意味する。そして、各項末尾に書き加えられた昌程講説寛佐開書等の部分が第一次増補分。さらに筆をかえて朱で追加されたのが第二次増補分となる。この部分は、虚舟なる人物(大坂人、通称吹田屋五郎兵衛か)が、寛文頃、昌程・昌陸から開書したものの書留である。おそらく、一次増補された段階の寛佐系「いろは新式」が、虚舟あるいは虚舟周辺の人物に伝えられたのであろう。

本書の特色は、基本的に寛佐系「いろは新式」の佛を伝えながら、昌程講説虚舟開書からなる独自の第二次増補部分を持つことであり、また、京大本に近い異本との校合が、全面にわたり詳細にほどこざれている点である。所謂「いろは新式」が、連歌師各自の立場から自由に増補されてゆく有様は、本書の分析によってもはっきりと読みとることができはすである。

(書誌) 横本 二冊(甲・乙)袋綴。寸法 一三・三×二〇・六釐。表紙は鳥の子紺地に記繋ぎ唐草押型文様。題簽 中央、打曇り紙に「寛佐 甲(乙)」と墨書。丁数 甲一一五 乙一〇二丁。序なし。奥書 最終項「す」の中ほどにあり(写真参照)。甲乙冊とも表紙やや痛みあり、またともに虫損あり。印記なし。

(文献資料部 母利司朗)



国際日本文学研究会集會議録(第八回)

目次

・あいさつ 小山弘志

・研究発表 地谷雄高の小説における語りの仕掛け Jacques Levy

「明暗」の視点をめぐって 松井朔子

お伽草子の切支丹シテレラ 「花世姫」鉢かつき「姥皮」のモデルと出典の考察 Chieko Mulhern

軍記物語における英雄像 山下宏明

日本におけるツルゲネフ受容に 関する一考察 Rexo Kim

島崎藤村の「家」と廉想渉の「三代」——「家」の束縛と崩壊を中心に—— 盧英姫

・公開講演会 江戸文学のユーモア Howard S. Hibbett

ラカシの系譜 阪倉篤義

・記録 日程

参加者名簿

国際日本文学研究会集會委員名簿

池田重座長のもとにおける二日目の午前は、Rexo Kim氏が、ツルゲネフの最もラジカルな散文詩「敷居」がロシアでは削除された部分も含め、ロシアで出版されるより早く二葉亭四迷によって朝野

新聞に翻訳掲載されたことを挙げ、当時の自由民権運動との関連でのツルゲネフ受容を考察された。盧英姫氏は藤村の「家」と廉想渉の「三代」を比較し、近代と「家」の関係の両国のバック・グラウンドの共通点と相違、男と女との違いの共通性などを論じられた、これらもまたいずれも国際集會にふさわしいテーマであった。二日目の土曜午後は、当館客員教授のHoward S. Hibbettハーバ

文献資料部事業報告 福田秀一

間もなく終る昭和五十九年度も旅費などの予算額は前年以上にきびしかったが、いつもながら図書館・文庫等所蔵者関係者の御好意や収集計画委員・調査員その他の方々の御協力によって、当部所管の事業面は概ね計画の通り進めることができたことを御報告し、関係各位にあつく御礼申上げる。

以下、恒例によって主として本年一月末までの主な事業につき、簡略に述べる。なお、当部事業の中心を占める国文学文献資料の調査及び収集(マイクログ撮影)の所

弘前市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館 関東地区 矢口丹波記念文庫・彰考館・流通経済大学図書館(祭魚洞文庫)・埼玉県立文庫・久松国男(当館寄託本)・東京芸術大学附属図書館(協本文庫)・東京大学国文学研究室・東洋文庫・某個人・法政大学能楽研究所(鴻山文庫)・宮内庁書陵部・東京都立中央図書館(東京史料他) 中部地区 新潟大学附属図書館(佐野文庫)・上越市立高田図書館・高岡市立中央図書館・金沢大学附属図書館・金沢市立図書館(藤本文庫)・加賀市立図書館(聖澤文庫)・長野市教育委員会(真田文庫)・上田市立図書館(花月文庫)・金城学院大学図書館・名古屋大学附属図書館(神宮皇学館文庫)・愛知県立大学図書館(石田文庫 古俳書一)・名古屋市鶴舞中央図書館・同蓬左文庫(尾崎コレクション)・神宮文庫 近畿地区 彦根市立図書館(琴堂文庫)・立命館大学図書館・舞鶴市立図書館・岡部町教育委員会(小出文庫)・陽明文庫・大和文華館・大方保・逸

間もなく終る昭和五十九年度も旅費などの予算額は前年以上にきびしかったが、いつもながら図書館・文庫等所蔵者関係者の御好意や収集計画委員・調査員その他の方々の御協力によって、当部所管の事業面は概ね計画の通り進めることができたことを御報告し、関係各位にあつく御礼申上げる。

以下、恒例によって主として本年一月末までの主な事業につき、簡略に述べる。なお、当部事業の中心を占める国文学文献資料の調査及び収集(マイクログ撮影)の所

弘前市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館 関東地区 矢口丹波記念文庫・彰考館・流通経済大学図書館(祭魚洞文庫)・埼玉県立文庫・久松国男(当館寄託本)・東京芸術大学附属図書館(協本文庫)・東京大学国文学研究室・東洋文庫・某個人・法政大学能楽研究所(鴻山文庫)・宮内庁書陵部・東京都立中央図書館(東京史料他) 中部地区 新潟大学附属図書館(佐野文庫)・上越市立高田図書館・高岡市立中央図書館・金沢大学附属図書館・金沢市立図書館(藤本文庫)・加賀市立図書館(聖澤文庫)・長野市教育委員会(真田文庫)・上田市立図書館(花月文庫)・金城学院大学図書館・名古屋大学附属図書館(神宮皇学館文庫)・愛知県立大学図書館(石田文庫 古俳書一)・名古屋市鶴舞中央図書館・同蓬左文庫(尾崎コレクション)・神宮文庫 近畿地区 彦根市立図書館(琴堂文庫)・立命館大学図書館・舞鶴市立図書館・岡部町教育委員会(小出文庫)・陽明文庫・大和文華館・大方保・逸

翁美術館・吉永文庫・住吉大社・大阪女子大学附属図書館  
中国四国地区

萩市立図書館・今治市河野信一記念文化館・高知県立図書館（山内文庫）

九州地区

祐徳稻荷神社・島原市立森岳公民館分館・熊本大学付属図書館（寄託、北岡文庫）・臼杵市立臼杵図書館

なお、右のほかに関西及び中京地区の多くの文庫につき、自発的に有益な情報を寄せて下さった方（個人）があり、それも今後の事業に活用するつもりである。

二、収集

本年一月末までに左の三二箇所  
の所蔵資料計五、〇一〇点を収集した。

北海道東北地区

秋田県立秋田図書館・鶴岡市郷土資料館・会津若松市立会津図書館  
関東地区

矢口丹波記念文庫・彰考館・麗沢大学図書館・東洋文庫（紙焼写真）・東京芸術大学附属図書館・学習院大学国語国文学研究室・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・東京都立中央図書館（加賀文庫他）

中部地区

上田市立図書館（花月文庫）・名古屋市蓬左文庫・刈谷市立刈谷図書館・新城市教育委員会（牧野文庫）  
岐阜市立図書館・神宮文庫  
近畿地区

彦根市立図書館（琴堂文庫）・京都女子大学附属図書館・陽明文庫・大阪女子大学附属図書館・林田良平（蝸牛廬文庫）・大和文華館・大橋政勝・吉永文庫  
中国四国地区

山口大学附属図書館・宇部市立図書館・今治市河野信一記念文化館  
高知県立図書館（山内文庫）  
九州地区

臼杵市立臼杵図書館  
既製マイクロフイツシュ購入  
静嘉堂文庫（物語文学書集成第五六編）  
海外資料の調査・収集

現年度は次のような進展を見た。  
一、カリフォルニア大学バークレイ校東亜図書館（旧三井文庫本等）  
前号及び前々号に記したように、文部省海外学術調査科学研究費補助金（以下「海外科研」と略称）で総括調査の子算が認められたので、去る十月に長谷川教授が出張して成果公表の手順・方法等につき先

文庫紹介⑤

舞鶴市立西図書館糸井文庫

正式名称を「丹後郷土資料」といい、市の指定文化財。若干の歴史文書を含むものの、過半が冊子、一枚物の文芸資料。旧蔵者糸井仙之助氏（明治七―昭和二四）の編になる「丹後郷土資料目録」（昭和三二）、改訂版昭和五八）がある。全六部三九項に分類するが、本文庫の名を江湖に轟かせた所以は

字版という謄本「丹後物狂」等を含む。

なお格別の御配慮により採取を許された糸井仙之助氏の蔵書印三顆をここに掲出する。いずれも朱捺。写真は54%に縮小してある。

参考文献 佐竹昭広氏「文学のひろば」（「文学」昭和52・6）

舞鶴市立西図書館  
〒624 舞鶴市字北田辺五一  
電話 〇七七三―七五―五四〇六  
（文献資料部 渡辺守邦）

舞鶴市立西図書館はマイクロフィルムにより二二リール二七六点を収集している。この分はすでに閲覧に供しているが落穂拾いの必要を生じて今年度に補充調査を行った。そのうちに、端本ながら他に所在を聞かないお伽草子「しゆてんとうし」の寛永版や、寛永古活

浦島一代記(二・〇・18) 前見返 朱  
静御前集 卷頭 朱  
岩城実記卷之卷 卷首 朱

方と打合せてきた他、昨年度（五十八年度）の調査成果の総括を進めている。

二、（国立）ソウル大学校図書館（旧京城帝大本）

昨年度福田が訪問して当館の趣旨を述べ、取敢えず日本文学関係の古写本・古活本等のマイクロ複写の希望を表明したが、先方はこれを甚だ好意的に受けてくれて、すでに撮影に着手しているとの連絡に接している。

三、国立台湾大学研究図書館（旧台北帝大本）

ソウル大学と共に台湾大学にもかなりの量の和古書があり、中には近世小説などに善本稀書の少くないことも知られていたが、去る十月に福田が非公式に訪問してその全貌を知ることができ、今後計画的に調査し、更に手続を踏めば収集（マイクロ複写入手）することも可能との見通しとなった。そして、それに先立って申請していた五十九年度の海外科研で予備調査の費用が認められ、本年二月末から三月にかけて当部教官四名（福田・田嶋・新藤・島原）が全書目のリストアップを目標に出張の予定である（この号が出る頃に

は無事帰国しているであろう）。更に、六十年にはその成果に基いて主要書目の書誌調査などを行うべく、海外科研を申請中である。

調査・収集すべき海外資料の所在は欧米を主としてこのほかにも多く、人手も予算も思うにまかせないが、学界の要望を踏まえて今後も国内同様力を尽したく、所在

## 研究情報部事業報告

棚町 知 彌

各室ごとの事業実施状況は次の通りである。

### 情報室

別項のように今年度の国際日本文学研究集会は、参加者も百名を超え、討論も活発で活気のある集會とすることができた。

新聞情報の収集も今年で十年を迎えた。国会図書館で新聞記事切り抜きの仕事の廃止が問題となり再検討中とのことであるが、この仕事は地味で、しかも一日分も手を抜くことができない。当館でも十年の節目を迎えて、さらに一層効果的に行うことを努力してゆきたい。

情報室は今年度から編成替えにより一名減員したが、以上二つの

情報をお持ちの方はどうか御提供下さるよう、この機会にもお願いする。

第一〜四室 第四室は前号に述べた通りであり、第一〜三室については前年度と大きな違いはないので、今回は紙面もないため省略する。（文献資料部長）

事業と、館報年2回発行という最小限の基本的作業は、管理部等の協力を得て、支障なく行うことができた。

### 編集室

『国文学年鑑』（昭和五十八年）の編集を行なった。三月二十五日 至文堂より刊行。

当室では去年の四月以来、『国文学年鑑』所収の雑誌論文データをコンピュータの端末から検索可能とするための、校正およびキー・ワード付加の試みを一年間行なってきた。具体的に言うと、各論文データに対して、関係する人名と書名（ほぼ著者名とその作品名に等しい）を適宜、といっても種々の制約から各二〜三個を限度と

して、与える訳である。作業にはこれらのキー・ワードやまた校正結果などを、みずから端末に向って入力することも含まれた。その結果、データの元になる原論文を

読み直しながらこの企図を遂行しようとするれば、経験を積んだ者が任にあたっても、一人で一年分のデータを処理するのに一年弱の日子を費さざるを得ないことが判明したのである。これは当初の予想をかなり超えるものであった。そこで、研究情報部全体の問題として事態への対応策を協議したうえで改めて根本的な計画の練り直しが必要である、との結論を得た。従って、当室は、昭和五十五年のデータを検索可能に仕上げたところで、本年三月をもって作業の試行を打ち切った次第である。

なおつけ加えれば、昭和五十九年以降のデータについては、まだ入力の手定は立っていないものの『国文学年鑑』編集作業の過程に織り込むかたちで前述のキー・ワードに関する情報を収集しており、やがて本格的に論文検索のための作業が再開される際には、もはや原論文を読み直す必要がないよう配慮している。

## 情報処理室

今年度の作業計画は、スタッフ全員が総入れ替えという危機的状況を踏まえ、①業務システムの見直しとオープン処理への移行、②業務システム開発の見直しと省力化の検討、③今年度開発すべき業務システムの選定、を主たる目標とした。

これらの作業は次年度当館がかかる多種の課題を解決するため必要不可欠な前提条件としてのシステム整備を意味している。

(1) 既開発の情報処理システムの見直しと運用

大規模な合理化を実施すべく検討を行い、実作業を行った、従来開発に追われ、ドキュメント類の不備に加えて各資源の世代管理が混乱していたが、必要最小限の資源についての状態をほぼ把握し得た。ついで、業務システムから見た各資源（狭義の資源の他に、人、ハード・ソフトシステム、運用条件・仕様、ファイル、等々をいう）の整備を行った。

懸案であるオンラインシステム管理への移行という点を重視したシステムの見直しと改善作業を大巾に実施した。ハードウェアシステ

ムについては、従来からネックであった漢字プリントシステムの諸問題解決、端末の機能拡張を重点的に実施した。また、大学間コンピュータネットワークに参画するためのハード・ソフトの準備を完了し、六〇年一月より試験運用に入っている。ソフトウエアについては、システムソフトの大巾な改善項目の設定と、メーカへの改善依頼及び当室開発ソフト群の全面的見直しと改善の検討及び一部実現化を行った。これらに関して、システム運用を統合的に管理するための方策立案と分析及び評価を行った。

ハードウェア、ソフトウエアの面で行った運用管理上の整備は、オペレータを中心とした作業の省力化として実施した。これにより運用管理システムとしてのデータ辞書用メタデータの生成が極めて容易となった。一部の業務システムでは、すでにオープン処理への移行を部分的に開始しており、省力化に寄与し得る成果もあつた。これらの作業は、従来のパッチ処理型のシステムを、会話モード型での処理へ書き換えるという方針で再整備を計った。今年度の最大

の作業であつた。

本年度の重要な問題の一つに、文字セット管理作業がある。本作業は、一次情報としての文字の選定には極めて深い専門的知識を要する。また、外注に対する納期、経費面での制約などが出現してきており、広く館内の協力を得る必要がある。このために、本作業のあり方についても電子計算機専門委員会（準備会）で、現在、審議をお願いしている。今年度は、各種の制約から、マイクロ資料目録を主とする外字二〇字を作成するのが限界であつた。ただし、選定作業は、約二〇〇字について終了している。

他の多くのシステム、例えば論文検索システム、全文処理システム等については、データ整備、システム改善を含めて現状凍結とせざるを得なかつた。

一方、データ作業用ツールとして従来からの主流であつたKSL方式は、全て廃止し、オンラインエディタ方式に改良した。また、ユーザ対応については、今年度は各ユーザが直接端末を用いて仕事を行う最初の機会であるため、定期的ニュースの発行、講習会の実

施、問い合わせ応答等を含め、窓口業務の整備とよりよいシステム作りを努めた。

これらの実作業に、今年度より予算化された外注SE経費の果たした役割は大きく、本外注SEの協力無くしては、今年度の作業の実施は極めて困難であつたことが痛感される。

## (2) システム開発

下記のように四件実施した。年度当初において、当部の予算、マンパワの問題を考慮して、

- ① 古典籍総合目録システム
- ② 古典作品典拠ファイルシステム
- ③ 運用管理システム

の三件としたが、年度途中において、共同研究のための

## ④ 連歌目録作成システム

を当部の予算とマンパワで業務システムとして開発することになった。このため、とくに上記③の開発を次年度繰越しとした。当初計画においては③は最も優先すべき開発主題であり、本件の成果は直接情報処理システム運用管理にかかわるものであるため、③のシステム分析を主とする作業だけでも行うこととしたが、大巾な遅延を生じた。

古典籍総合目録システムは、昨年度までに開発されている書誌データ入力部、著作データ入力部の各システムの運用システムを作成した。これにより、実運用への指針を得るための試験運用を実データを用いて約三ヶ月間整理閲覧部担当者主導の下に実施した。現在、実運用が開始されているが、システムの的には課題が山積している。

本年度は、著者データの入力部システムの開発を実施した。これにより、データ作成、入力に関する三つのシステムが完成したことになる。次年度以降、運用システム及び目録等作成、検策システム等の開発に着手する体制が整った。

古典作品典拠ファイルシステムについては、今年度はデータ入力部のシステム設計を行った。整理閲覧部担当者との密接な打合せにより、仕様固めを行い、システム設計を発注した。別途述べられているように、データ入力校正に対するサポートシステムを用意した。連歌目録作成システムについては、昨年度データ入力部が完了しており、引き続き版下打出システムを作成した。エンドユーザがデ

ータを直接管理することを目標とするシステム設計を行ったが、結果的には直接出力に力点を置いたシステムとした。

今年度の研究課題はとくに設定出来なかつたが、原文書を処理するためのシステム仕様の検討を行い、原文書の蓄積、索引等のデータ構造分析を行った。これらの成果の一つとして、マイクロ資料目録データの累積化とオンライン検索システムの搭載がある。現在、オンライン検索として試験を実施中である。本システムは、目録検索あるいは閲覧利用を目的とした開発を行っていないため、機能やユーザインタフェースに多大の問題がある。これらを解決するため、整理閲覧部との協力の下に約一年の試験運用を実施することとした。

一方、懸案であった情報検索委員会及び電子計算機専門委員会(準備会)についての規程も制定され、新年度よりの新たな組織作りの一端を完了した。すなわち、専門的に共同利用問題を検討するための情報処理システム運用委員会の発足と、館内調整を目的とする同専門委員会の発足である。最後に、国文学研究に密着した

計算機利用の課題は、今年度未着手であった。次年度以降の重点課題の一つとしたいと痛感しており、

## 整理閲覧部事業報告

本田 康雄

館内外の国文学研究者の協力を得て、対応をとってゆきたい。(研究情報部長)

今年度から五年計画で始まった古典作品典拠ファイル作成事業は、館全体をあげてその計画・予算要求等に当たってきたが、いよいよ事業を開始するにあたって、事業の総括とデータ作成、ファイルの作成については整理閲覧室が分担することとなった(システムについては研究情報部情報処理室)。この事業については別に本号で紹介するが、今年度はその具体的な実施計画の策定を行い、データ作成を開始した。このファイルは、当館の各種データベースに対して典拠としての機能を果たすべきものであり、その完成に努力したい。

ところで、当館が収集したマイクロフィルムは、保存を行ってきたが、収集を始めてからすでに十年以上の年月を経過しているため、今年度はその保存状況の抜取り検査を実施した。その結果、保存状況は非常に良好であった。しかし、これは十年程度の保存結果につい

てであり、永久保存を期している当館としてはさらに良好な保管方法、設備等を追求していきたい。その他、当部が担当する業務(資料の受入、整理、保存、利用サービス、及び参考業務、公開講演会の開催、展示等)は順調に進展した。

### (一)整理閲覧室

以下に各業務毎に報告する。

#### (1)受入業務

五十九年十二月末における今年度の資料受入数は、マイクロ資料一、二、四三三、四書一、六三三冊、逐次刊行物約三、九一〇巻号冊であった。

#### (2)古典籍総合目録作成事業

これまでに書誌データ約一万七千件のパンチを行い、さらに、前年度パンチしたものも含めて入力処理を行った。また、システムの一部完成に伴い、その機能テストを情報処理室と協力して行っている。

#### (3)整理業務

「古典作品典拠ファイル」の基本的な作成計画が固まった。五年間継続する事業だけに年度初めから時間をかけて練り上げてきたものである。事業内容を一言で言えば、岩波書店刊「国書総目録」全八巻中の国文学関連項目をデータベース化するものである(但し、所在、翻刻、複製等の事項は除く)。そのためには、「国書総目録」の記載形式をコンピュータが処理できるファイル形式へ変換するためのシステムが必要であり、情報処理室と打ち合せを重ねてきた結果、概要設計を完了し、現在、詳細設計に移っている。

このファイルは、著者名のコントロールを行ったうえ、古典籍総合目録システムをはじめ当館の各種データベースの作品典拠ファイルとして、単独に、また目録や索引の作成など、多様な利用が期待される。十二月に、第一回分、約八千五百件のパンチ発注を行った。新刊書、和古書の整理、帙作成、補修などの定常的業務は予定通り進んでいる。

『マイクロ資料目録一九八四年』は、約三、五〇〇件の最終回分データの入力を終え、年度内刊行に

向けて、校正、編集作業を進めている。収録点数は、約八、一〇〇点(23文庫)に達する見通しである。(4)閲覧業務

昭和五十九年下半年(七月～十二月)は、入室者数が五、三六六人(一日平均三八人)、文献複写が一〇、九三五件(一日平均七六件)であった。これを前年同期と比べると、入室者数が五%増、文献複写が一四%増、となっている。中でも文献複写のうち、リーダープリンターによる複写は三九%増と大きな伸びを示している。また、相互利用の申込受付は四八六件であった。

すでに前号の「利用者へのお知らせ」で通知したように、七月から、文献複写申込受付時間を、平日が十五時三〇分まで、土曜日が十一時三〇分まで、と変更した。

昨年度来、サービス体制の整備、改善として、種々の方策を講じてきたが、今後もサービス向上のために努力していきたい。

#### (5)マイクロ室業務

九州大学附属図書館(支子文庫)、小保内道彦(稲荷文庫)等、六七一リールの閲覧用ポジフィルムを作

製した。紙焼写真本は、西尾市立図書館(岩瀬文庫)、富山県立図書館(志田文庫)等、一〇六二冊を製本し、登録、装備を行った。又、文献複写サービスでは、十三点の撮影と九一点のポジフィルム作製を行った。

#### (二)参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

●第7回夏期公開講演会「日本文学と中国文学」(7月26日～28日、於当館。講演集刊行予定)

26日 「平安時代の説話と中国文学」大曾根章介(中央大学教授)、「漢籍受容と源氏物語」池田利夫(鶴見大学教授)。

27日 「中世歴史文学と中国文学」増田欣(広島女子大学教授)、「近世の剪燈新話受容の諸相」富士昭雄(駒沢大学教授)。

28日 「桃源郷の系譜——陶淵明から漱石へ——」芳賀徹(東京大学教授)、「中国白話小説と初期読本」高田衛(東京都立大

学教授)。

●第21回公開講演会(10月27日、於名古屋市・長円寺会館ホール「サンギータ」)

「人麻呂の声調」稲岡耕二(東京大学教授)、「撰集の「うた」」後藤重郎(中京大学教授)。

●第14回特別展示「蔵書印展」(11月1日～15日。国文学研究資料館特別展示図録を刊行)

●常設展示  
第24回「源氏物語」(7月2日～9月22日)

第25回「近世後期の文学」(10月8日～10月24日および11月19日～12月15日) (整理閲覧部長)

#### 昭和59年度国文学研究資料館出版物一覧(国文関係)

- 国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録(1984)
- 国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録(1985)
- 国文学研究資料館特別展示図録(蔵書印展)
- 国文学年鑑(昭和58年)
- 国文学研究資料館報(22号、23号)
- 国文学研究資料館紀要(11号)
- 国文学研究資料館講演集6(日本文学と中国文学)
- 調査研究報告第6号
- 国際日本文学研究集會会議録(第8回)
- 共同研究報告3「連歌資料のコンピュータ処理」

評議員会議の開催

三月十五日(金)に評議員会議が当館中会議室において開催され、議長等の選出並びに管理運営の概況、昭和60年度予算内示、昭和60年度事業計画及び名誉教授称号授与規程等について評議が行われた。なお、議長及び部会長は次のとおり選出された。

議長

阿部秋生

(代理)

児玉幸多

国文学部会部会長

阿部秋生

史料部会部会長

児玉幸多

運営協議員会議

三月一日(金)に運営協議員会議が当館中会議室において開催され、副議長の選出並びに教官人事、管理運営の概況、昭和60年度事業計画、昭和60年度予算内示及び名誉教授称号授与規定等について協議が行われた。なお、副議長に神保五彌氏が選出された。

外国人研究員

ハワード・スコット・ヒベット

現職 ハーバード大学教授

研究題目 江戸文学におけるユ

ーモア

期間 昭和59年7月15日～昭和

60年1月14日まで

外国出張

昭和59年度科学研究費補助金(海  
外学術調査)調査総括  
長谷川 強(研究代表者)

研究題目 カリフォルニア大学  
パークレイ校所蔵国文学

文献資料の総合調査―国  
際協力による在外国文学

文献の総合的研究  
期間 昭和59年10月23日～11月  
2日まで

昭和59年度科学研究費補助金(海  
外学術調査)  
福田秀一(研究代表者)

田嶋一夫、  
新藤協三  
島原泰雄

研究題目 国立台湾大学研究図  
書館蔵日本文学関係資料

の調査―在外日本文学関  
係資料の総合研究―  
期間 昭和60年2月26日～3月  
11日まで

昭和59年度国際研究集会派遣研究  
員  
安永尚志

会議名 ユネスコ・インフォーマ  
ティクス暫定政府間理  
事会第一回会議

総合情報計画(GIP)  
政府間理事会第5回会議  
期間 昭和59年11月13日～23日

文部省在外研究員  
安藤正人

渡航先 連合王国(ギルドホー  
ル図書館)、フランス共和  
国(国立文書館)、ドイツ  
連邦共和国(議会文書館)、  
アメリカ合衆国(国立文書  
館)

目的 文書館(Archival Reposi-  
tories)における前近代  
近代史料の保存、利用シ  
ステムに関する調査研究  
期間 昭和59年8月1日～9月  
30日(2ヵ月)

私学研修員  
松原一義

現職 四国女子大学文学部助教

研究題目 今出川春季とその周  
辺(中山孝親、親綱父子  
など)の研究  
期間 昭和59年4月1日～9月  
30日(6ヵ月)

富士昭雄

現職 駒沢大学文学部教授

研究題目 西鶴の比較文学的研  
究

期間 昭和59年4月1日～9月  
30日(6ヵ月)

昭和59年度科学研究費補助金  
大藤 修

奨励研究(A)  
研究課題 日本近代化過程の農  
村問題と報徳運動

委員会日誌  
昭和59年

11月9日 国際日本文学研究集会  
委員会(第三回)

11月16日 国文学文献資料調査員  
会議(近畿地区)

12月3日 共同研究委員会(第三  
回)

12月18日 国文学文献資料収集計  
画委員会(第二回)

12月20日 文献目録委員会(第二  
回)

昭和60年  
1月30日 共同研究委員会(第四  
回)

3月7日 情報検索委員会(第二  
回)

3月22日 文献目録委員会(第三  
回)

4月1日 文部省在外研究員  
安藤正人

渡航先 連合王国(ギルドホー  
ル図書館)、フランス共和  
国(国立文書館)、ドイツ  
連邦共和国(議会文書館)、  
アメリカ合衆国(国立文書  
館)

目的 文書館(Archival Reposi-  
tories)における前近代  
近代史料の保存、利用シ  
ステムに関する調査研究  
期間 昭和59年8月1日～9月  
30日(2ヵ月)

私学研修員  
松原一義

現職 四国女子大学文学部助教

## 利用者へのお知らせ

### ◆所蔵目録刊行の御案内

このたび「マイクロ資料目録」と「逐次刊行目録」の最新版が刊行されましたので御案内いたします。

### (1)「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八四年」(第八冊)

この目録には二三所蔵者(文庫)分、八、〇八七点が収録されています。そのうち九所蔵者(文庫)が、今回初めて収録されるものです。なお、今回収録分の名古屋市蓬左文庫は、すべて「尾崎久弥コレクション」です。

収録所蔵者(文庫)は次のとおりです(\*印は新規収録分)。

- 文庫No. 所蔵者
- 20 宮内庁書陵部
  - 25 東京都立中央図書館
  - 30 刈谷市立刈谷図書館(村上文庫)
  - 32 水府明德会彰考館
  - 33 東洋文庫
  - 34 神宮文庫
  - 38 名古屋市蓬左文庫
  - 73 今治市河野信一記念文化館
  - 81 佐賀県立図書館

88 東京芸術大学附属図書館

99 高知県立図書館(山内文庫)

204 \*静岡県立図書館(葵文庫)

208 \*青森県立図書館(工藤文庫)

209 富山県立図書館(志田文庫)

210 \*船橋市立図書館(書誌資料)

214 \*西尾市立図書館(岩瀬文庫)

216 \*学習院大学国語国文学研究室

室

219 \*麗沢大学図書館(田中文庫)

221 \*岐阜県立図書館

222 \*三原市立図書館

f2 中村幸彦

f2 \*樋口芳麻呂

### (2)「国文学研究資料館蔵逐次刊行目録一九八五年」

収録誌数は、前年分より一五三誌増え、二、八九一タイトルで、昨年十一月末までの受入れ分が収録されています。それ以降の受入れ分については、カウンターで係員におたずねください。

### ◆マイクロ資料目録の市販について

「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八三年(縮刷版)」(第七冊)が笠間書院より刊行さ

れ市販されています(定価七、〇〇〇円)。既刊六冊とあわせて御用ください。

### ◆「共同利用のてびき」改訂版の作成について

当館では、創設以来、共同利用機関として全国の利用者の皆様に均等に利用していただくために、相互協力サービスを特に重視し、積極的に取り組んでまいりました。その一環として、利用者が所属している機関の図書館等を通して当館を利用していただくための具体的な方法や手続等を記したリーフレット「共同利用のてびき——相互協力サービス案内」を昭和五十六年三月に作成し、図書館、文庫等、関係各位に配付するとともに、来館利用者にも配付してまいりました。

このたび、その改訂版が出来ましたのでお知らせいたします。なお、当館では相互協力サービスとして、複写、貸出、レファレンスを行っています。詳細につきましては、「共同利用のてびき」をご覧ください。又は閲覧係に

おたずねください。

### ◆伊達市開拓記念館のサービス区分について

これまで北海道の伊達市開拓記念館のマイクロ資料のサービス区分は「X」(未回答のためEに準じ館内閲覧のみ)でしたが、このたび伊達市教育委員会より正式な御回答をいただき、サービス区分「A」と決まりました。したがって今後は、紙焼写真、ボジフィルム作製の複写サービスができるようになりました。なお、これに該当する伊達市開拓記念館の資料は、「マイクロ資料目録一九七八年」(第二冊)に収録されています。どうぞ御利用ください。

### ◆新指定貴重書

当館では新規受入図書の中から、特に資料的価値が高いと認められるものを選んで、貴重書に指定しております。このたび次の資料が新たに貴重書に指定されました。これによって当館の貴重書は、計六十二点となりました。

●「雑屋立圃絵入書巻」(写)

# 昭和六十年春季学会開催一覧

## 情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

- 国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。
- 果鴨三―二〇―一 大正大学文学部国文学研究室内②六月二三日 ③大正大学
- 全国大学国語国文学会 ①下―一〇 二千代田区猿樂町二―八―一 三 桜楓社気付②六月一―二日 二松学舎大学
- 中古文学会 ①下四六三名古屋市守山区大森二―一七二三金城学院大学国文学(松田)研究室内 ②五月一八―一九日③学習院大学
- 中世文学会 ①下―二〇二千代田区富士見二―一七一 法政大学能楽研究所内②五月二五―二七日 ③法政大学
- 日本演劇学会 ①下―一六〇新宿区西早稲田一―六一 早稲田大学演劇博物館内
- 日本歌謡学会 ①下―一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内
- 日本近世文学会 ①下―一六二新宿区戸山一―二四―一 早稲田大学文学部神保五弥研究室内②六月二―二―二三日③武蔵野女子大学
- 日本近代文学会 ①下―一二文京区目白台二―八―一 日本女子大学文学部国文学科内②五月二五―二六日③専修大学
- 日本口承文芸学会 ①下―一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内②六月一―二日③姫路市
- 日本文学協会 ①下―一七〇豊島区南大塚二―一七―一〇②六月二―二日③同志社大学
- 日本文学風土学会 ①下―二一四川崎市多摩区東三田二―一―一 専修大学文学部国文学研究室内②五月二五日③専修大学神田校舎
- 日本文芸研究会 ①下九八〇仙台市川内東北大学文学部内②六月八―九日③東北大学文・教育学部大講堂
- 俳文学会 ①下―一五七世田谷区成城六―一―二〇 成城大学文芸学部尾形研究室内
- 表現学会 ①下四八〇―一 愛知県豊田市長久手町愛知淑徳大学国文学科研究室内②五月一八―一九日③岐阜大学
- 仏教文学会 ①下―一八三世田谷区駒沢一―二三 駒沢大学文学部国文学研究室内(東部) 下六〇三 京都市北区紫野北花ノ坊町九六
- 仏教大学高橋貞一研究室内(西部) ②五月三―一―六月二日③駒沢大学
- 万葉学会 ①下五五六吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内 美夫君志会 ①下四六六名古屋市中京区八事本町一〇―一 中京大学文学部国文学研究室内
- 和歌文学会 ①下―一三―一九一文京区本郷郵便局私書箱第二八号

館報入手ご希望の方は  
郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料(切手)を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報 第二十四号  
昭和六十年三月発行  
編集・発行者  
国文学研究資料館  
東京都品川区豊町一―六―一〇  
郵便番号一四二  
電話(七八五)七―三(一代)  
印刷所 株式会社 三興